

# 畜産 FAX 情報 第3号

令和8年 6月 15日

発行:ゆとりみらい 21 推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

本年のチモシー主体の草地は「出穂始:6月9日、出穂期:6月12日」と平年並に推移しています。

良質な粗飼料確保のため、生育状況に応じた収穫作業を行いましょう。

## 1.条件に合わせた添加剤の活用

(1)乳酸菌:乳酸菌が働きやすい環境を整えるため、原料草を予乾して乾物率30%前後に調製しましょう。

(2)ギ酸:天候が優れず収穫せざるを得ない場合など、原料草の乾物が25%以下の場合は、ギ酸を選択して pH を下げ、不良発酵を抑制させることを推奨します。原料草を搾汁し、pH 試験紙や pH メーターで pH3.8 になるよう添加量を調整しましょう。

## 2.一番草の収穫後の追肥について

牧草の再生を促し夏枯れを予防するために、1番草刈取後10日目を目安に追肥を行いましょう。

一方、スラリーを散布する場合は、新しく分けつする茎をつぶさないよう、可能な限り早く散布しましょう。また、草地更新後、少なくとも1~2年は散布を控えます。

また、気温が暑い時に作業をしてしまうと、夏枯れを助長するので、タイミングをずらします。

## 3.ガガイモの発生が増加しています

ほ場外周でガガイモが伸びています。ほ場内部に侵入させないため、発生が多い箇所は外周の刈り払いをおすすめします。

また、ガガイモは、一度ほ場内に侵入すると、根絶が非常に難しい雑草です。そのため、現段階の目標は「とうもろこしの収穫ができる程度に、ガガイモの生育を停滞させ、ほ場に種を落とさない」こととなります。

昨年、被害が大きかったほ場は、生育処理を2回行うことを推奨します。その際、適用時期の長いブルーシアフロアブル(飼料用とうもろこし7葉期まで)を2回目の散布までとっておくことをおすすめします。

お困りの際は関係機関にご相談ください。



図 ガガイモ